岩波講座
日本文学史 第九巻 近世

読本

重友毅

岩波書店

読本

重友毅

目次

一　読本以前……三
二　上方読本……八
三　江戸読本……二三
四　結　語……三五
参考文献……三七

一 読本以前

近世小説史の流れをたどって、その中心ともなり、根幹ともなって、それぞれの時期を代表したと見られるものを、発生の順に挙げるならば、まず最初に仮名草子があり、次いで浮世草子があり、その最後に来るのが読本であったといえるであろう。そのうち仮名草子・浮世草子は上方の地を中心に、読本は江戸の地を中心に、それぞれの全盛期を持った。

いうまでもなく近世文学の基本的特色は、文学の実権が庶民の手に移ったという実情にもとづき、それによる独自の色彩が全体を濃く染め上げているところに見られるのであるが、小説もまたその例外であるはずがない。かつては支配階級のものであった物語様式も、近世初期において庶民のものとして受けつがれ、また切り換えられるのであるが、そこからそれはそれなりの変貌を示し、やがて自己の目標を掲げてその歩みを進めながらも、さまざまの客観条件との関連において、独自の行程をたどるのであり、それが近世小説の主流と見なされる仮名草子・浮世草子および読本の変遷過程に如実に反映されていると見られるのである。

したがって今、読本についての概説を試みるにあたっても、それに先行する仮名草子・浮世草子について、それが近世小説史上に果した役割について一応触れておく必要がある。だがその前に、この三種の小説型態について、やや具体的な説明を加えておくことにしよう。まず仮名草子は、その盛行の時期に前後の二期があり、前期は元和・寛永(一六一五—四三)を中心とし、代表作家としては如儡子(本名・生没年未詳)、後期は万治・寛文(一六五八—七二)を中心とし、代表作家としては浅井了意(?—元禄三年 一六九〇)を挙げることができる。浮世草子もまたその流行の時期を前後の二期に分けて見ることができ、前期は貞享・元禄(一六八四—一七〇三)を中心とし、代表作家としては井原西鶴(寛永一九年 一六四二

―元禄六年―一六九三）、後期は正徳・享保（一七一一―三五）を中心とし、代表作家としては江島其磧（寛文七年―元文元年一六六七―一七三六）を挙げることができる。なお其磧の浮世草子は、その出版書肆の名を取って普通に八文字屋本と呼ばれる。さらに読本についても、同じく前後の二期に分けて見る必要があり、前期は明和・安永（一七六四―八〇）を中心とし、代表作家としては上田秋成（享保一九年―文化六年一七三四―一八〇九）、後期は文化・文政（一八〇四―二九）を中心とし、代表作家としては曲亭馬琴（明和四年―嘉永元年一七六七―一八四八）を挙げることができる。以上、きわめて簡単に、代表作家の如きもわずか一名にしぼったが、それらは必要に応じて後にくわしく説くことにする。

さてこの規定の上に立って、話を先に進めるならば、まず仮名草子は、近世小説のさきがけではあるが、まだ庶民のための読物となりきってはいなかった。その制作にたずさわる者も、少数の例外を除いては、支配者の側に立つ階層に属していた。もちろん権力の座からは遠く、したがっていくぶん批判の自由を持つ人たちではあったが、それによって直接庶民に呼びかけようとするのでもなく、相手として予定されていたのは、彼等と同じ階層に属する人々であった。少なくとも如儡子もしくは烏丸光広（天正七年―寛永一五年一五七九―一六三八）等の作品によって代表される前期の仮名草子においてはそうであった。

だがそのうちにも、おのずからなる変遷はあった。ようやく経済の実権をにぎり、生活の余裕をも持つに至った庶民が、その文体の平易さに引かれて、招かれざる読者としてそこに集まって来たことがそれをみちびいたともいえるが、無視しがたいその勢力に押されて、制作者の側も、庶民の興味に訴える要素を取り入れ始めることを余儀なくされた。浅井了意のおびただしい作品群によって代表される後期の仮名草子がそれであり、前期の基本的態度がくずされたわけではないが、庶民への歩み寄りが見られたことは事実であった。

要約するならば、仮名草子はまだ庶民の手になる小説でないばかりか、庶民のための小説でもなかった。さらにいうならば、それらは小説の名において一括するにしてはあまりにも雑然としたものを含んでおり、一種の混沌状態を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

呈していた。物語・紀行・随筆ないし小話集等々を含むそれらは、むしろ読物の名で概括するのが適当ともいえる。しかしこの混沌こそ、平安以来の貴族的な物語の伝統が、庶民的な近世小説へ切り換えられるために必要な混乱であったと考えられる。事実この現象のなかから、またそれを前提として、真に庶民小説の名に値する西鶴の浮世草子の出現が見られるのである。こうして仮名草子は、小説の概念からはみ出る多くのものを含みながらも、依然として近世小説史上に重要な地位を与えられるべきものと考えられるのである。

なお、これに関連して附言するならば、この仮名草子があまりにも雑然たる諸型態を含むところから、これを整理して、物語的・小説的型態、またはそれに準ずべきもののみにその地位を与え、随筆型態その他はこれを除外し、おのずから別個の範疇に入れて扱うべきではないかとの提案が一時なされたことがある。一応もっともな意見ではあるが、しかしこの場合、事情は右に説いた如くであったとすれば、これはたやすく従うことのできないものといわなければならない。またこの種の、いわば潔癖好みの形式的整理は、あまりに早く事がらを割り切り、かえって実情を見誤まる危険を伴なうことをも注意すべきであろう。さらにこの種の見解を押し進めて行くなら、問題は後のことに及ぶが、西鶴の短篇にも、ほとんど随筆型態と選ぶところのないものが数多く散在するが、これらをも整理しなければならないという、技術上の難関に突き当らなければならないであろう。

さて西鶴の浮世草子は、そのような仮名草子の混沌のなかを潜り抜けて出現した。多種多様の試みを重ね、自由な型態の駆使から、一段と庶民への近づきを容易にし、またそのことをみずから志向し始めてもいた仮名草子は、ここに庶民出身の作者を得て、一挙に庶民小説へと性格を転換した。それは仮名草子の到達すべき最終段階であり、事実西鶴はその生涯を通じて、仮名草子作者をもって自任していた。だが同時にそれは、新型態の小説の輝やかしい出発点でもあった。今日の文学史が、西鶴自身の自覚とはかかわりなく、浮世草子の創始者としての栄誉を彼に加えているのも理由のないことではない。

西鶴がそこで試みたことは、あくまでも庶民の立場に立ち、その独特の興味と関心からする人間生活の探究と、その再現であった。その素材も多くは庶民社会に求められ、彼の筆によって、庶民も一篇の主人公としての地位を獲得した。それが庶民の読者を対象とし、それへの呼びかけを念として筆を執られたものであることはいうまでもない。こうして西鶴によって始めて庶民の手中のものとなった小説は、だが同時にそこから独自の歩み出しを持たなければならなかった。

西鶴の観察は鋭く、表現もまた的確であった。彼によって人間の生態は、かつてないほどのあざやかさをもって照らし出された。こうしてその作品は、近世小説に新しい性格づけをしたばかりでなく、質的にもきわめて高いものを示したのであった。しかしその彼も、一所に腰を据えて、人間が周囲の与件との対決においてその行動を進めて行く過程を、熱心に追究することはしなかった。彼の目に触れる個々の現象は、一瞬にしてその急所を射抜かれはしたけれど、その目はやがて素早い連想の動くままに、他の新しい現象へと移されてしまう。こうしてそこに見られるものは、おどろくべく豊富な現象が、相互に深い関連を持つことなく、相寄り相集まることによって、おのずからに織り成すところの人生模様であった。それは一つには、新しく開拓された庶民社会が、ほとんど応接にいとまないほどの素材の氾濫をもって彼に迫ったことにもよると思われるが、また一つには、長く俳諧師として、句ごとの変化に意を用いる習癖を身につけたことが、そのままここに持ち込まれたことにもよるものと思われる。いずれにしても、そのことは結果として、彼の小説を構成の上で散漫な、まとまりのないものとした。長篇形式においてはもとより、短篇形式においてすら、その欠陥を免れることはできなかった。

そのことはやがて当時の読者にも、不満の思いを抱かせるに至ったと思われる。それは西鶴没後の浮世草子作者が、期せずして一様に説話の構成の面に力を注ぐに至った事実によって察せられる。もちろんこれらの作者はいずれも、西鶴ほどの観察力も表現力も持ち合わせてはいなかった。だがそのことだけが、彼等の精力を構成の面に集中せしめ

たとは考えられない。当時の読者が西鶴に十二分に満足していたとしたなら、これらの後続作家も、自己の才能の及ばざるを知りつつも、西鶴の模倣作品の制作に全力を挙げたことであろう。そうではなく、欠陥は西鶴の作品にあった。そのすぐれた点は、彼等もこれを推重しつつ踏襲するとともに、その足らざるを補おうとしたのであった。

西鶴以後の作家としては、西沢一風（寛文五年―享保一六年（一六六五―一七三一））・都の錦（生没年未詳）・錦文流（生没年未詳）・北条団水（寛文三年―宝永八年（一六六三―一七一一））・月尋堂（生没年未詳）・青木鷺水（万治元年―享保一八年（一六五八―一七三三））などが挙げられ、なかには西鶴の踏襲一点ばりの者もいたが、その多くは説話の構成の面で、西鶴に何ものかを加えようと努めたのであった。そのうち一風と文流は、同時に浄瑠璃作者でもあった関係もあって、その構想に浄瑠璃ふうのものを加味して作品の長篇化を図ったし、そのほか軍記物の構想にすがるところもあり、この点は他の作者にも影響して、同様の手段を取る者があらわれもした。

しかしこれらの作者と、その活躍の時期をほぼ同じくし、もっとも長期間にわたると同時に、もっとも精力的にその動向に拍車をかけたのは江島其磧であった。彼の浮世草子の代名詞である八文字屋本が、西鶴以後の浮世草子を代表するものとして遇せられているのも理由のないことではない。もちろん彼とても、西鶴の浮世草子を本質的に発展させるだけの力を備えていたわけではない。その努力も、したがって説話の結構を整備し、そこに新味を加えるという、形式の面にとどまらざるを得なかったけれど、彼としては、そこに読者の要望に応えて、当代作家の進むべき道があると信じたのであった。そしてその限りにおいて、彼は三面六臂の活躍ぶりを示したのであった。

彼が製本の形式にまで新機軸を出したことはしばらく別として、説話の結構についての工夫の跡には見るべきものがあった。儕輩の試みた手段で彼の取り上げなかったものはなく、さらに彼によって始めてくわだてられたものも少なくはなかった。歌舞伎・浄瑠璃・軍記物・軍談など、およそ当代人の目に触れる限りのもので、その筋立てに利用せられなかったものはなかったといってよい。そしてその苦心が報いられ、一般読者から最大の拍手をもって迎えられたのが、いわゆる気質物であった。なるほどそれらは、作品として質的には低いものであったかも知れない。しか

し西鶴の欠陥を補足しようとして、その後の作家が、説話の構成の整備に力を注ぐことに、いわば使命の如きものを感じ取って動いたなかにあって、其磧は明らかにその代表選手であったといってよい。彼は常に巧妙でしかも斬新な構想を求めて、これに四十年にわたる作家的生涯を賭けたのであった。

以上、きわめて大づかみな概観を試みたが、これを前提として、次に読本の発生の問題に移ることにしよう。

二　上方読本

其磧の没後、なお三、四十年は、その流風を追う者が跡を絶たなかったが、多田南嶺（元禄一一年―寛延三年　一六九八―一七五〇）を除くほかは、とくに見るべきものもなく、多くは惰性的な歩みをつづけるに過ぎなかった。しかしそのうちに、やや遅れてこの系列に加わった者に、上田秋成のあったことを見逃すわけには行かない。

作家としての秋成が最初に筆を執ったのは、『諸道聴耳世間猿』（明和三年）であり、つづいて『世間妾形気』（明和四年）が成った。これらはいずれも、その題名の示す如く八文字屋本であり、其磧・南嶺の流れを汲むものであった。才気にあふれる当時の秋成が、試みに筆を小説に執ろうとすれば、この八文字屋本を選ぶよりほかはなく、それほどそれはなお流行の余勢を保っていたし、これを押し退けてその地位に代るべき新様式の小説はまだあらわれてはいなかった。

こうして彼の筆ずさみは、まずここに向けられたのであったが、生活に余裕ある商家の子弟として、文芸書の耽読に年を重ね、また、市井の風聞にも興味を持ったところから、そこに出来上ったものは、その時期の八文字屋物としてはかなり充実したものであった。キビキビした筆致、引きしまった構想にも、生来の天分がうかがわれはしたが、しかし根本の態度・手法には、其磧の気質物以来のふうがそのままに受けつがれていた。「されば二老（註、其磧・自

笑)が文理は、五巻に猶名残ぞをしまる。この弊言数ふればはたちに余り、撰めば一つとして採るものなし。偶々なぐさむ一ふしは、さてもさても八文字が糟粕」(『妾形気』序)というのも、その意味では、必ずしも謙抑の辞とのみはいいきれなかった。

しかし当時の彼には、それなりの制作欲がたぎっていた。すでに『妾形気』が、その序によれば、もと二十余篇の草稿のなかから、取捨選択して十篇をとどめたものであった。さらに『世間猿』『妾形気』の奥附広告によれば『諸国廻船便』が、また『妾形気』の奥附広告では、その上に『西行歌枕染風呂敷』が、出版せられるべく予定されていた。もっともこれらの八文字屋本は、予告のみでその実現を見るに至らなかったが、しかしそこに、とくに『廻船便』の場合、ある程度の草稿が用意せられていたことは考え得ることであり、少なくとも相当具体的な腹案が成っていたことはほぼ確実と見てよい。そしてもしもこれらの計画が予定通り進行していたとするならば、その刊行は『妾形気』のそれにつづいて、早ければ明和四年(一七六七)、遅くも翌五年のうちには見られたはずである。ところがついにそのことなく、かえって何の前触れもない『雨月物語』が、代りにその姿をあらわしているのである。

ただしそれをいうのは、『雨月』の序に作者みずから、「明和戊子(註、五年)晩春、雨霽れ月朦朧たるの夜、窗下に編成し、以て梓氏(註、出版書肆)に畀ふ」(原漢文)といっているのにすがっての話である。ところが事実において、そこから当然想像されるところの、明和五年(一七六八)刊の『雨月』で現存するものが一部もなく、あるのはそれから八年を隔てた安永五年(一七七六)刊のもので、それがおそらく初版であったと考えられるところから、右の序にいうところに多少の疑念がかけられるのである。しかしこのように本文の脱稿とそれの刊行との間に、ある年数の隔りを持つことは、当時の出版界にあっては、必ずしもめずらしい出来事ではなかったことを思えば、この点から直ちに作者の言を否定してかかるわけにも行かない。ただその刊行までの数年間に、一応出来上った原稿に、改めて多くの筆を加えることは十分考えられることであり、したがって明和五年成立の『雨月』の本文というのも、いよいよの刊行

直前に仕上げられたものとは、かなりの相違を持ったものと見ることが許されるのである。

これだけのことを断わっておいて、ここで話を元へもどすと、明和五年三月にひとまず脱稿した『雨月』の第一稿は、したがって明和四年のうちに稿を起されたものと見てよいことになる。ところがその明和四年は、かねて計画もされ予告もされていた『廻船便』や『染風呂敷』が、しきりに稿をつがれており、すでにある程度の成稿も見られたはずの年でもある。そこへ今また『雨月』の執筆が割り込むとなると、この一年はつまり三つの作品が、それもそのうちの二つは八文字屋本、一つは読本というふうに、性質のまったく違ったものが、いわば三つ巴の形で、作者の脳裏に渦を巻いていたことになる。そしてその結果は、すでに見たように、二つの八文字屋本は、その計画を中止して跡形をもとどめないものとなり、かえって当初は作者にも予期されなかった読本が、新たにその姿を登場させることになるのである。しかしこうして出来上った『雨月』の第一稿は、そのように限られた期間に、目まぐるしい変転を経て出現したものであるだけに、まだ読本として十分に整備されたものとならず、かなり八文字屋本の余風を拭い切れないものではなかったかと想像される。さらにいうならば、そこには計画の中断によって葬り去られるべきであった八文字屋本の素材が、捨て去るに忍びず、扱いを変えて再生させられたものもあったであろう。その第一稿が直ちに刊行の運びに至らなかった理由の詳細は知るべくもないが、あるいはそこに作者自身の自己抑制があり、改稿に次ぐ改稿による、出版の延期があったのかとも考えられるのである。とにかく八年後に刊本となった『雨月』の本文が、八文字屋本とは明確な一線を画し、読本として純化したものになっていることから見て、その八年は作者の意図を貫ぬくためには必要な年月であったと思われるのである。

それにしても、明和四年を中心とする一時期における作者の急転換は何に由来するのであろうか。それに対する答えは、しかしすでに与えられている。すなわち、近路行者(本名、都賀庭鐘)(生没年未詳)の『英草紙』(寛延二年)『繁野話』(明和三年)の強い影響がこれをみちびいたとするのである。都賀庭鐘は大阪に住んだ漢学者兼漢方医であり、秋成

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

の句読の師であったとも、また医術の手ほどきをしたとも伝えられ、個人的交渉もあったらしいが、しかしこのことはこの場合大した意味を持つことではない。またその影響の順序からすれば、秋成が現に制作に従い、小説への関心も深まっていた時期にあらわれた『繁野話』の方が先で、『英草紙』はそこから溯って参照せられたものと考えられるが、これも両者がともに同形式・同性質の短篇小説集であったことを思えば、大して問題となることでもない。問題はそれよりも、あれほど熱心に八文字屋本と取り組み、その矢つぎ早の刊行を志していた秋成が、なぜ急にそれらのものに心を引かれるに至ったかの点にある。

だがその前に、この『英』『繁』の二書が、どのような性質のものであったかについて一言触れておく必要がある。それらはともに五巻九篇から成る短篇小説集であるが、特徴はそのいずれもが中国白話小説の翻案であるところにあった。同じ中国小説でも、文言小説が古くから渡来していたのに比し、白話小説は本国でも宋以後に発達し、したがってわが国に伝わることも遅く、おおよそ宝永(一七〇四―一〇)の頃から一部の読者に親しまれ、やがて翻訳もあらわれるに至ったが、さらに一歩を進めてその翻案を試みたのが、ほかならぬ『英』『繁』の二書であった。

ところでその原拠となった白話小説は、口語体もしくは俗語体をもって綴られたものであったので、その本国においては、文語体をもって綴られた文言小説に比して、一段と卑俗なものと見なされていた。しかしその文言小説が、文体の上で伝統の拘束を受け、その彫琢に力を注ぐ余り、説話そのものの展開に意を用いる余裕を欠いたのに対し、白話小説はその自由な文体を駆使して、事の隅々に至るまで筆を及ぼし得たばかりか、説話の内容においても奇趣縦横の妙趣向を構えることを得た。その書名の上に「古今奇談」と銘打った『英』『繁』の二書も、またその結構の妙を伝えることに、とくにその力を注いだのであった。したがってこれらを手にする者が、第一に目を見張るのもこの点にあったと思われる。

そしてこのことに関しては、秋成もまったく同様であったと思われるが、重要なことは、そのおどろきを持った秋

成が、ほかならぬ八文字屋本作者であったことである。すでに眺めて来たように、江島其磧によって代表される西鶴以後の浮世草子作者が、一様に心を注いで来たのは、説話の結構を整備し、さらにそこに新味を加えることであった。その心構えは彼等に共通のものであり、その先頭に立つのが其磧であった。その其磧の系統を引いて八文字屋本作者として立った秋成にも、したがってその心構えは受けつがれたのであり、当面其磧の最高の成果である気質物の跡を踏襲しつつも、なおその先にあるものを摸索していたことはほぼ確実と見てよい。その矢先に突き当ったのが、かつてその類例にも接し得なかった、異国風の奇趣奇構を持つ『英』『繁』二書であった。秋成がすでにその半ばまで稿を進めていたかも知れない『廻船便』『染風呂敷』を投げ捨てて、そこに引き寄せられて行ったのも、むしろ自然の勢いであったといってよい。

だが問題はなお先にある。もしも秋成がその奇趣奇構に引かれ、その限りにおいて、彼もまた白話小説を取り上げたのであったとしたら、そこに出来上ったものは、おそらく八文字屋本としての一歩前進ということにとどまったであろう。しかし『英』『繁』二書によって教えられ、また彼自身取り上げもした当の白話小説が持つ特徴は、別のところにも見られた。いわば第二の特徴とも見られるべきものは、そこに多くの知識がばらまかれていることであった。登場人物が長々と知識的論議をかわし、また作中にあらわれる器物についての来歴がくわしく説かれる、などの類がそれであった。この構成の妙味とは別に、いやでも気づかれる特徴も、もし無視しようとするならば無視し得たはずであり、おそらく普通の作者なら、このわずらわしく退屈な部分は敬して遠ざけたことであろう。だが秋成はそうではなかった。彼は当初の目的とは別に、この物語・小説の概念とは容易に溶け合いそうもない知識的要素をも、あえて取り入れようとした。そしてこのことに関しては、当時の彼が一般文芸書の乱読のうちにも、とくに国学方面の著述に関心を持ち、ほとんど独学に近い形ながらも、ようやく国学者として成長しつつあった事実を思い合わせなければならない。こうしてその学者としての知識への特別の関心が、その摂取を容易にしたと思われるのである。

しかし、話はなお次へ進まなければならぬ。白話小説には、まだもう一つの特徴があった。そのいわば第三の特徴は、倫理的意図があらわに示されていることであった。それは必ずしも峻厳ではないが、なおその複雑で変化に富む結構の間を縫って、全体を統べくくる一筋の大綱となっていた。そして秋成は、この特徴をも見逃さず取り入れようとした。このことは彼が、一時は八文字屋本の作者であるにふさわしくさばけた生活を送ったことがあるにもせよ、もともと倫理的に潔癖で、自他の行動を律するにきびしい人柄であったことと関係があると思われるが、同時にまた右に見た国学者的立場もそこに関与しているものと考えられる。いうまでもなく国学は、古典の注釈学であるにとどまらず、進んで古道を明らかにし、それによって儒・仏二教に毒された人心を覚醒せしめようとするところに、その究極の目標があったのである。

このようにして秋成の、『英』『繁』二書を媒介としての白話小説との結びつきは、まずその複雑巧緻な結構に魅せられたところに始まるのであり、それはいわば八文字屋本作者としての使命感に駆られたものであったといってよい。彼はこの新奇な構成手段を分捕って来ることによって、そこに八文字屋本としての一躍進をとげようとくわだてたのであった。しかしそのために、さらに深く白話小説に親しむうちに、八文字屋本とは本来何のかかわりもない、知識的および倫理的要素に強く化せられるに至るのであり、同時に今までの足場をも捨てざるを得ないことになるのである。その過程は、いわばミイラ取りがミイラになったともいうべきたぐいのものであった。そしてそのためには、彼がただの八文字屋本作者でなく、国学者的教養の持主でもあったことが大きく関与していることも、右に眺めて来た通りである。だがそれにしても、その白話小説からの影響感化の跡が、皮相なものとしてでなく、十分に消化された上で、一つの作品として結実するためには、相当の時日がかけられなければならない。したがって、そのようなものとしてあらわれた『雨月』も、さきに眺めたように、明和五年の第一稿は、昨日まで八文字屋本に筆を執っていた時期のものであるだけに、新様式の小説として十分の特色を示したものではなく、その仕上げには、安永五年までの八

年間の年月が必要であったと思われるのである。こうして秋成の読本『雨月物語』の誕生が見られるのであり、それは彼がそれ以前に筆にした八文字屋本の一つの展開として、それとの深いつながりのあることが知られるのである。

さてここで、近世小説史でいう読本の名義について一言しておく必要があろう。それはもと、当時の一般読者の間に唱え出されたもので、他の小説型態に対してなされたのと同様、きわめて便宜的な呼称であった。それも始めは庶民の間に流行した、絵画に興味の中心をかけた一類の小説に対し、口絵・挿絵を備えはするが、主として本文の読解を求めるところの小説類を指すという、まことに漠然とした内容のものであった。それによれば、上は井原西鶴の浮世草子から下は為永春水の人情本に至るまで、ひとしく読本ということになる。だがこういう大まかな類別から生れた呼称のほかに、やがてその本文を読むことを主とする小説のなかの一類を指すのに、この名称をもってするという風習も生じて来た。この狭義の読本の呼称が、そのまま伝えられて今日にも及ぶのであるが、それも当初は馬琴の『八犬伝』を基準に、それに類する小説の汎称というだけで、かなり明確を欠くものであった。こうして近代に入り、それらが学問的対象となり、漸次にその性質が明らかにされ、やがて『雨月』もその先駆的作品の一つとして位置づけられるに至るのである。

しかしなおそこには、究め尽されない多くのものが残っているのであって、『雨月』もそのような位置づけまでは認められるに至ったが、なお読本史上に一つの地位を与えられるにとどまっていた。そしてそれに比して、『英』『繁』の二書が読本の開祖として、すべての上に位置せしめられているのである。しかもそれは淵源するところが遠く、すでに近世中期の代表的読書人であった大田覃（南畝、蜀山人）（寛延二年―文政六年 一七四九―一八二三）の随筆『一話一言』に、「近路行者は都賀氏、名は庭鐘。戯作する所、英草紙・繁野話あり、世に行はる。今の都下読本の風は、これを学ぶに似たり。」と説かれており、それがやがて定説となり、今日にまで踏襲せられているのである。そしてここにいわれている読本は、いうまでもなく狭義のそれであり、都下読本とあるのは、やがて後に触れる馬琴等の江戸読本を指しているのである。

もちろん『英』『繁』の二書が、読本の成立に対して一の先駆的役割を果したことは、すでに見たところによっても知られる通りであるが、しかしこれをもって直ちに読本の開祖とすることには、反省の余地があるものとしなければならぬ。もしこの説に従うならば、読本は彗星の如く突如としてあらわれ、たまたま八文字屋本の衰運に乗じて、その座を奪ったということになり、その推移はまったく偶然の機縁によるものと見るほかはない。もしも話が読本だけに限ってのことであるならば、それでも差支ないであろう。しかしすべては、庶民の手に移り、それとして性格づけられた近世小説の変遷過程における現象として考察されなければならぬ。そう見る時、漢学者庭鐘の余技として形成されたに過ぎない『英』『繁』二書に、あまり過大な評価を与えることは適当でないと思われる。それよりもむしろ、それらの影響を十分に受けたことを認めつつも、『雨月』の方により大きい地位を与えるべきものと考えられるのである。すなわちそれは、近世小説の本流に棹さし、水路の行手を見定めて、あざやかな取り舵をしたものであり、決して一時の気まぐれによって舟を進めたものではない。八文字屋本から読本へと、近世小説の主流が大きく方向を転換し、しかもそれが大河として次第に川幅を増して行く上に、秋成の果した指導的役割はきわめて大きいといわなければならない。いわば『英』『繁』二書は、それだけでは傍流で終るべきものであり、それを本流にみちびき入れたのが『雨月』であったと見るべきであろう。

秋成が八文字屋本作者から読本作者へと、しかもきわめて短期間にその転換をやってのけたことについては、彼が国学者的教養を身につけつつあったという事情が助けとなったことは、さきにも見た。それが当時の一般作者仲間にあっては、彼にのみ特殊な条件であったことはいうまでもないが、しかしこの場合、一般読者の暗黙の要求に応えるためには、それがむしろ必要な条件であったことが知られなければならない。というのは、西鶴以後の浮世草子、とくに八文字屋本が、説話の構成の整備に主力を尽し、またそれなりの成果をも挙げて来たが、その半面に内容の上での充実がおろそかにされたという事実があり、千篇一律の話題の繰り返しは、ようやく読者の倦怠を招いていたから

である。その上にそれらは、すべての問題を微温的に処理し、結局はそれを笑いに流し込むという態度を常に取っており、それも久しきにわたっては、もはや魅力として呼びかける力を失いつつあった。こうして今少し真剣に人生と取り組むことへの要求が芽生えそめており、それはすでに八文字屋本のうちに、かすかな流れとして存在したものではあったが、それが今や強く引き出されようとしていた。秋成の『妾形気』巻三の二「米市は日本一の大湊に買積の思入」、同三「二度の勤は定めなき世の蜆川の淵瀬」に語られた一つづきの物語も、その一つのあらわれであり、そこには誠実に生きた主人公への深い感激が示されているのである。あるいは予告のままに終った『廻船便』『染風呂敷』にも、同種の物語が用意せられていたかとも疑えば疑えるのである。そしてこの傾向は、秋成がその個人的条件から、白話小説の知識的・倫理的要素を取り入れたことによって、期せずして、強力に押し進められることになるのである。もちろん、だからといって、彼が八文字屋本から読本へと筆を移すにあたり、その主要動機となったものが、説話の結構を整備し、さらにその進展を図ろうとするにあったことは、依然として変りがない。これはそれに比して、いわば副次的な動機として持たれたものといってよいのであるが、しかしなお無視することを許されないのである。そしてこのことのためには、八文字屋本の主材となった目前の庶民生活は、しばらく遠ざけられることになる。それは過去の世界に溯らせられるか、でなければ代って武家もしくは公家が登場することになるのである。それはちょうど、西鶴が義理の問題を追究するために、しばらく町人の世界をはなれ、武士の世界へ入って行ったのと似ている。

さてこのようにして生まれた『雨月物語』、もちろん安永五年に刊行されたそれについていえば、それは何よりもさきにすぐれた怪談小説集として知られている。怪談小説そのものは、仮名草子以来めずらしくもないが、秋成がその跡をついだのは、もともと彼が怪談に対して深い興味と関心を抱いていたことによるのであり、またその特殊の体験から、怪異の実在に対する根強い信念を持っていたことが、そこに微妙な作用を及ぼして、すぐれた怪異描写をなさしめたものと思われるのである。しかしまたそこに忘れられてならないことは、それも彼が白話小説中の怪談から、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com